水の螺旋

Tomokazu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
水の螺旋

【Ｎコード】
Ｎ８５００Ｙ

【作者名】
Ｔｏｍｏｋａｚｕ

【あらすじ】
国立Ｋ大学の大学院に所属する学生、鳥栖　凜。
彼は石山　満男教授から、研究テーマの変更を勧められる。
そのテーマは、これまで世界中のどの研究者も扱い得なかった、この現実とは別の世界『精神世界』にまつわる研究だった。
避けられない宿命を自身のＤＮＡに書き込まれていた凜は、同じ宿命を背負わされた少女、日下　愛希とともに、真実の追求を目指す。

果たして、彼らの前に待ち受ける、驚愕の真実とは…！？

第一章・Repetitive（part. 1）

（第一章・Repetitive）

1

また、この夢か。彼は思った。

自分は今、水の中にいる。けれど、自分の身体自体は水に包まれてはいない。第一、肌に水の感触も、水中にいれば感じるであろう浮力も感じない。むしろ、四方を水の壁に包まれた空間の中、水でできた地上の上を重力に従うがままに立っている、と表現したほうがいいかも知れない。

目の前に、水の階段があった。ひと巻きのらせんを描きながら、それは下の階へと続いている。一歩一歩、確かめるように下りてみる。ピシャリ、ピシャリという水の跳ねる音を聞きながら下の階に下りる。突然、眼前に宇宙とも云うべき、何か果てしのないものが広がった。次第に胸の中の時間が加速度を増し、気づけば自分は今、光の速度で気の遠くなるような時間の中を旅している。それは、我々のたどってきた進化の歴史だ。過去と現在と未来を途絶えることなく繋いでいる、らせんの形をしたものの果てのない旅路だ。

彼は急に怖くなった。かたく目をつぶったが、身体に感じているそのスピードはなくならない。おそるおそる目を開けてみた。自分の周りをぐるぐる回っているらせんの一部分が、激しい光を放っていた。その光のエネルギーは、自分の目から自身の身体全体の細胞へ伝わり、身体全体を激しく揺さぶった。まるで、自分の目の前のらせんと、自分の身体の中のらせんが呼応しているかのように思えた。

彼は大きく息を吐き、再び目を閉じた。今の周囲の情景は、測り知れない空洞のような得体の知れない怖さがあり、スリリングであり、壮大であり、心地よくもあった。生命の源である宇宙と、自分が一体になっているような、そんな快感があった。

と、怖いと思うくらいに肌で感じていたスピードが急に消えた。彼女は暗闇の中に落ち込んでいた。目の前には、大きな壁が立ちはだかっている。暗闇なのにも関わらず、目の前の漆黒の壁だけははっきりと見える。その壁には、何やら文字が書き込まれている。A，T，　G，　Cという四つのアルファベットが延々とランダムに続いている。こんな文字の羅列を彼は大学の教科書で見た記憶がある。自分の中にも生来刷り込まれている、生命を司る暗号、生命が生命たりうる証。壁にはその証となる情報が刻まれていた。

むろん、その暗号の並びをすべて覚えているわけではない。しかし、なぜか彼には、これがヒトゲノムの配列だと思えた。さらに、その配列にところどころミスがあることまで分かった。つまり、突然変異によって、情報が書きかえられてしまっているのだ。彼は、何とかこの壁を壊したいと思った。そうしなくては、私たちには未来はない、という直感があった。しかし、目の前にはびこる巨大な壁に比べ、自分の存在はちっぽけなものであり、こんな巨大な壁など崩せそうにはなかった。敵わないと悟った彼は、絶望と恐怖に襲われ、その場にへたり込んでしまった。

果てのない暗闇の中で、壁はちっぽけな男をあざ笑うかのようにそびえ立っていた。

けたたましい目覚ましの音で、彼は目を覚ました。

窓の外は明るい。いつもの朝の光景だ。彼はほっと胸を撫で下ろした。この夢を見るのは、はじめてのことではなかった。もう何度も見ている。なのに、夢の中のあの闇の恐怖から、明るい朝日の住む朝に帰ってこれた時に、胸を撫で下ろす癖は未だに治らない。

彼は起き上った。布団をたたむこともなく、むしろ踏みつけるよ

うにして歩き出し、冷蔵庫のドアを開けた。中に、昨日買ってきた缶コーヒーが入っている。彼は缶コーヒーのプルタブを開け、一気に飲み干した。生きた心地が取り戻せた気がする。

彼の名は、鳥栖（とりす）　凜（りん）という。国立K大学の大学院に在籍する学生である。もともと大学の学部時代からK大の理学部生命科学科に在籍していた彼は、特に大きな目的もなく、友人たちの多くがそうするように、同大学の大学院・理学研究科生命科学専攻に進学した。しかし、ある研究テーマにそって実験をし、成果を出すのが望ましいとされる大学院の研究室において、彼は特に研究が好きというわけでもなく、その上、与えられた研究テーマも、なかなか成果の出せないものであった。そんなどうしようもない研究室生活を大学４年の卒業研究から2年間も続け、気がつけば修士課程の2年生になっていた。修士課程の2年といえば、そろそろ自分の研究成果をまとめて修士論文を作成し、修士号を取得しなくてはならない学年であり、また、就職するかさらに博士課程へ進学するか、という節目でもある。しかし、彼は思うところがあって就職活動も始めていなかったし、かといって博士課程に進学する意思もとくになかった。何とも八方ふさがりな感じがして、彼は途方に暮れていたのだ。

その上、眠ればあんな不思議な夢を頻繁に見てしまう。やるせない気持ちになってしまう。

しばらくボーッとしていたかったが、そういうワケにもいかない。今日も朝から研究室へは行かなくてはならない。彼は適当に朝食を済ませて、身支度をととのえて、下宿先のアパートを出た。穏やかな春の風が、身体を通り抜けるが、彼の心はどうにもじめじめした梅雨のようだ。

彼は自室のある2階から下に降り、アパートを出た。どうしても行きたくないという気持ちに後ろ髪を引かれ、少し遅刻気味の出発だった。

第一章・Repetitive（part. 2）

2

結局、凜は本来研究室に着くべき時間より、２０分遅れて到着した。研究室の戸を開け、朝の挨拶を誰にもすることなく、自分の実験机へと向かう。すると、「おい、鳥栖」と呼び止められた。助教の上島孝平だった。

「お前、また遅刻」

たしなめるように云う上島に対して、凜は「すいません」と悪びれないふうで答えた。

「こんなに毎日毎日遅刻してくんの、お前だけだぞ。いったいぜんたい、やる気あんのか？」

「ああ、はぁ…」

煮え切らない態度の凜を、上島は訝るような目つきで見る。

「実験も最近は全然進んでないみたいだしさ。一体何しにここに来てんだよ。まさか、このままうだうだやってても修士号取れるとか、思ってんじゃないだろうな。修士ったって、そんな甘いモンじゃないぞ」

「…すいません」

「明日から、もうちょっと早く来いよ。ったく…」

凜は舌打ちしたいのを抑え、上島に少し頭を下げて、自分の実験机へと歩いて行った。

実際のところ、この数ヶ月間実験は進んでいなかった。実験しても失敗続きで、なかなかデータが取れないし、別の実験の案も思い浮かばない。自分の不器用さや実験センスのなさがその一因であるというのは、認めざるを得ない事実だと思う。しかし、もうひとつ大きな要因があると、凜は思っていた。つまり、自分は研究テーマ

に恵まれなかったのだ、と。
　とにかく、もともと実験が得意でない人間が、数ヶ月も実験がうまくいかないという困難に直面し、より一層士気が失われてしまったのだ。これが、ある程度でも実験データが出ていれば、もう少しやる気も出るというものであろう。
　などと考えながら歩いていたら、ふと自分の実験机に小さな紙切れが置かれているのに気がついた。どうやら、研究室のボスである教授からの伝達事項である。
『重要な用件あり　到着次第、教授室へ来るように』
　重要な用件、何だろうな。と凜は思いながら、机に鞄を置き、教授室へと向かった。

　凜は教授室の扉をノックしてから開けた。
「失礼します」と云って中に入る。デスクの上に置かれたパソコンのディスプレイを眺めて背を向けていた男が、くるりと椅子ごと回転して、こちらを向いた。やや薄くなった白髪交じりの頭髪。見透かすような細く切れ長の目。あざけるかのような微笑みを蓄えた唇。やや面長の顔がそれらを支えている。この男こそが、凜の所属する研究室のボス、石山　満男教授であった。
「やあ、鳥栖くん。遅かったじゃないの」
　黙ったままの凜に、石山はさらに言葉を続けた。
「また遅刻？　相変わらずだね。上島くんに怒られなかったかい。彼、君によくない意味で目をつけているからね」
　この悠長な喋り方が、凜には鼻につくのだ。凜はうんざりしたような表情を浮かべるのを我慢して、平然とした顔を取り繕いながら云った。
「僕に何かご用ですか」
「ああ、うん。まあね。それより、最近実験はうまくいってるのかな」
　石山は話をはぐらかしてきた。

凜は素直に、「いいえ、最近は全然うまくいってないです」と返した。
「だろうねぇ。君の最近の様子を見ていたら。それに、どうにも君は実験操作に関しても不器用そうだ」
この男は、ただあざけるためだけに、わざわざ人を呼びだしたのだろうか。凜は少しムッとして、「用件はそれだけですか。それじゃあ」と、教授室を去ろうとした。
「まあ、まあ、待ちたまえ。そんなに話を急ぐものじゃない。君を呼びだしたのは、ある重要な提案があったからなんだ」
石山は、去ろうとする凜を呼び止めて、こう云った。
「提案ですか？」
「そうだ。実は君には、今日から研究テーマを変えてもらいたいのだ」
「テーマを変える！？」
石山の突然の申し出に、凜は驚いた声をあげた。当然である。修士課程の2年といえば、本来これまで行ってきた研究をより掘り下げ、修士論文を作成できるレベルまで解析を進めるべき学年なのだ。しかし、そんな地点に入ったであろう凜に対して、石山は研究テーマの変更を勧めてきた。
石山は笑って云う。
「今の君を見ていたら、このままでは埒が明かないと思うんだよ。まあ、それは君だけに問題があるわけじゃない。君自身の能力や精神面を除いても、君の今当てられているテーマは、世界中の研究室で別のモデル生物を使ってすでに解明が進んでいるから、なかなか新たな発見ができないものだしね。そこで、だ。君にはまったく別のテーマについてもらおうというわけだ。これから君にしてもらおうという研究内容は、おそらく世界中の誰もがやっていない。しかもだ…」
「…しかも？」
凜は自発的に訊き返した。

石山は身を乗り出して言葉を続ける。
「やれば１００％、結果が出る」
「１００％……？」
にわかには信じられない話だ。まだ学生という立場であり、なおかつそれほど研究意欲のない彼でも、５年以上も科学の勉強をしていれば、研究は生半可な努力ではなかなか結果が出ないものだということぐらい知っている。しかし、石山は１００％の成果を保証してきた。これはどうにも奇妙だ。
「もちろん、無理にとは云わない。君が従来のテーマを継続して、修士論文を作成するというのなら、それでもいい。けれどね、君は今のテーマにそれほど情熱はないみたいだし、確かに今の成果の上がり方から考えても、情熱を持てと云う方が無理というものだろう。それならいっそ、より成果の上がりやすいテーマに変更するというのも、いい手なんじゃないかと思うんだが。どうかね」
確かにそうかも知れない、と凜は思った。今のウダツの上がらない自分の状態は、この成果の上がりっこない研究テーマのせいかも知れない。研究室の同級生たちは、程度の差はあれど、自分よりも扱いやすいテーマを与えられて、それなりの成果を上げているのだ。そのことに対する劣等感が、今の情けない自分を作る要因になっているのだ。元々、生命科学という学問が嫌いではなかった。学部の頃は、それなりに頑張って勉強してきたし、それなりに楽しんでやっていたつもりだ。それが、研究室で研究をすることになってから、一気にやる気が失せてしまった。
…すべてはテーマのせいなんだ。
凜はそう自分に云い聞かせた。そして、石山の申し出に応じるのも悪くないかも知れないと思い始めた。
「それで、どんなテーマに変更するんですか」
凜は訊いた。しかし、それに対する石山の返答は、どうにも意外なものだった。
「悪いが、それは今ここでは云えないんだよ」

「はい！？」
凜の素っ頓狂な声を可笑しがるように、石山は笑った。
凜は可笑しいどころか、イライラが募るばかりだ。ハナッから腹立たしい石山の人を食ったような態度や喋り方にも我慢して、石山の話を聞き、提案に乗ろうとしたら、今度は真っ向から転がされるような言葉を返され、嘲笑される。まるで、大きなボールの中に閉じ込められて、辺りをゴロゴロと転がされているような気分だ。
「まあ、そんなに焦らないでくれたまえ。もちろん、ゆくゆくは教えるつもりだよ。けれど、このテーマは世界中の研究者たちが、あまり介入しなかったものだからね。ちょっと様子を見たいんだ。君がこのテーマの研究を引き受けてくれるなら、一定の成果が出てから、君に具体的なことを伝えようと思ってね」
石山の云うことが、凜にはどうにも理解できなかった。しかし、まあ成果が出るなら乗ってみてもいいのではないか、とも思った。別にこのテーマの研究を一生続けるわけではない。飽くまで修士を出るためのアイテムとして使えればいい。そのテーマを継続するのが嫌だったなら、それ以降はやめればいいのだ。まあ、それは修士卒業後も研究を続けるならの話だが。もっとも、就職活動もしていない凜にとって、このまま博士課程に進学する可能性は十分に高い。
「…分かりました。やってみますよ」
凜はそう答えた。
石山は相変わらず不敵な笑みを浮かべながら云う。
「そうか。引き受けてくれるか。じゃあ、さっそく君に課題を与えよう」
石山は自分のデスクにあるパソコンから、ひとつのテキストファイルをオープンし、それをプリントアウトした。そのプリントを手に取り、凜に手渡す。
凜はそのプリントを眺めた。そこにはA，　T，　G，　Cという四つのアルファベットが不規則に羅列されたものが、１０００ほど続いていた。どうやらＤＮＡの塩基配列のようだ。

「塩基配列のようですが、何の配列ですか」
凜は訊いた。
「悪いが、それも今は教えられないんだよ」
石山はそう云って、ひと呼吸おいてから続けた。
「さて、この配列にはとある規則性がある。その規則性を見つけてきてくれ、というのが課題だ」
凜は手渡されたプリントを眺めながら、この課題に何の意味があるのだろう、と思った。どうやら、課題をやってみないことには、それは分からないようだ。

（参考：プリントの配列）

・・・GCCCTAGCAGTGCATAGTGATATCCTT
TGACATACGGACTATACGATCCCCCTTTTT
GCAGTGCATAGTGATCAGTGCCCTACCCCC
TTTCCCACTATTTGCAGTGCATAGTGATCA
GTGCCCATACCACCTGTTTTCAATTGGGCT
GTGCACTGCATAGGGATCAGTGCCCTACAG
CTTTACACCCCTTTTGCAGTGGAAAGTGAT
CAGTGCCCCTAACGGTCGATACAGGATAATGA
CGCAGTGCATAGTGATCAGTGCCCTTTGTT
GACAAGTGTCCAGTGCAGTGCATAGTGATC
AGTGACCCTAGTAACCCCCATTTTGCATG
AACCCGTGCAGTGCATAGTGAGTGCCC
TAATGGGTTTTTGCGATTGCAGTGCAAAG
TGATCAGTGCCCTAAAAACAAAAATGCGCA
TCATTTTTACAGTGCAGTGCATAGTGATCA
GTGCCCTAAATAAGCCCCATTTAGATCGAT
GCAGTGCATAGTGATCAGTGCCCTAGCCCA

T C G G A C T G T A C G T C C T
T A G T C A A T T T A T A A C T
A G G G C C G G T T T G G G T T
T T C C C T A A T T A A A T A T
G G C A C G G T T T T T C G A C
G C A T C C A C T G G C A C A T
G A T A G A T A T C C A T C A G
C T G G G T C G A C C A G A C T A
T A C T G A A T G C C G T G T C T
G G C G G G G G A C C T G A A G G
C T C A G T T C A A A G C A A G C
A G C T G G G C A T C C T T T A
C A A C A A C C C G A C C T A A G
T T T T T T C T C C T T G C T T
G C T G T C C A C C C A A A C G C
C A C T A A T A A C C A G G C C
A G C G T G A A G C C T C G A C A
T T A C G T A T T G G A T A T
. G T C A G T T A A A C C T G A
. G T C C C T T T T G G C G T G
G A T G C G C G T C C G G C T
G G A G C G C C G A A C A C G
T T A T T C G A C G T A A A A
A T T A A C C G C C A G T T A
A A C T A C C A T C G T A A C
T C C G T A G G G C C T G A C A
C G C C T T T G C C C T C T G
C A A G T G G C A A C A T T G T
A T T C T C G C G T G C T T A G
T G T A A G A A T A G A T T T C

第一章・Repetitive（part. 3）

3

教授室を出ると、研究室はもう本格的に稼働していた。
研究室の学生たちは、論文を読んでいたり、パソコンでデータ整理をしていたり、ピペットを手に実験作業をしていたりしている。
凜はそんな彼らを横目に通り過ぎ、自分のデスクに着くと、石山から手渡されたプリントを鞄の中に無造作に放り込み、そのまま鞄をひったくるように担いで、研究室を後にした。課題を学内の総合図書館で済ませようと思ったのだ。別段、凜にとって図書館が集中しやすい場所というわけではなかったが、煩わしい研究室の中で行うよりは、気分的にもいささか楽だ。
理学研究科研究棟を出て、図書館に向かう道中、前から知っている顔がこちらに向かって歩いてくるのが見えた。ショートカットに眼鏡をかけた、利発そうな顔立ちの女の子。向こうもこちらに気づいたらしく、少し笑って会釈をした。凜もその子に対して、会釈を返す。が、向こうの潔い態度とは逆に、凜の会釈は何だかぎこちなく、頭を下げたのか下げてないのかといった程度のものだった。本来、凜は対人コミュニケーションが苦手である。突然、思いもよらない相手に出くわすと、なおさら不自然な態度になってしまう。
間宮　遙、彼女は本学の二年生でありながら、石山研究室に出入りする学生である。入学当初から、相当優秀な生徒として評価が高く、そのこともあって、この４月から研究室の実験補助のアルバイトをすることになった女の子である。
お互いが話すのに苦労しない距離まで歩み寄った時、遙が「おはようございます」と云った。凜も半ば条件反射的に「ああ、おはよ

う」と返す。
「どちらにいかれるんですか？」
「図書館だよ」
「へぇ～。私はこれから研究室へ向かいます」
「えらく早いんだな。授業は？」
「今日は授業が午後からなので。じゃあ」
凜はしばし立ち止まって、歩いてゆく遙の後ろ姿を眺めた。午前中に授業もないのにわざわざ研究室に来るなんて、熱心な子だな、と凜は思った。しかも、相当優秀であるにも拘わらず、そのことを鼻にかけるでもなく、気さくで親しみやすい雰囲気も醸し出しているのだ。まったく、人に出くわしたらすぐ挙動不審になってしまう自分とは大違いである。おまけに、研究室内での外見に関する評判も高いときてる。
「ったく、才色兼備かよ」
凜は小さく嫌味を云うと、再び図書館に向かって歩き出した。

凜は図書館に着くと、なるべく学生の少ないスペースの壁際の席に座り、鞄から例のプリントを出した。無造作に放り込んだせいで、少し皺が寄っている。凜はそんなことはお構いなしで、それを机の上に置き、そこに書かれたＤＮＡ塩基配列を眺めてみた。一番目の塩基から、ＧＣＣＣＴＡＧＣＡＧＴＧＣＡＴＡＧＴＧＡＴ…という風に続き、全部の塩基は１０００もある。
ここから規則性を捜さなくてはいけないのだが、どこから着目すればいいのだろうか。
ＤＮＡの塩基配列というのは、すべてが理由もなくランダムに並んでいるというわけではもちろんなく、意味のある特有の配列も多く存在している。例えば遺伝子と呼ばれる領域は、我々の身体を構成するタンパク質の設計図であるし、その他にもさまざまな生理的活動のために必要な特殊配列や、領域特異的な配列というのはたくさん知られている。中には、短い配列が数百、数千も続いているも

のもある。
　凜はこの中にその配列が隠されているのだろうか、と考えてみた。そしてその瞬間、気の遠くなるような心地がした。これまでに実に多くの特異的配列が確認されており、どれに目をつければいいのかさえ分からないからだ。仮に、ひとりでその作業をするとなると、少なくとも数ヶ月という時間を要するであろう。
　しかし、今の段階では、もちろんその可能性も捨てきれない。凜は、特に深い考えもなく図書館まで出てきたことを後悔した。研究室なら、パソコンや専門書がすぐに手に届く場所にあり、すぐに調べられる。図書館にもパソコンや本はないわけではないが、なにぶん広いので、探しに行くだけでも骨が折れることだろう。
　面倒に思いながらも、凜はエレベーターまで歩き、そこから理系専門書が置いてあるフロアまで上がっていった。フロアで手ごろな分子細胞生物学系の本を一冊手に取り、もといたフロアへと戻る。
　いざ本を開いてみたが、なにぶん分厚い本である。どこを見ればいいのか分からない。ましてやどの現象に関わるものなのか、目星をつけないことには、探しようもない。彼は一瞬にしてやる気を失った。それでも、諦めては終わりだと、ウダウダと本を眺めてみたが、当然目ぼしいものには行き当たらない。彼は結局本を閉じた。
　ふと見れば、１２時を回っていた。まだ図書館に来て１時間程度しか経っていなかったが、丁度やる気を失くしたところである。凜は休憩がてら、食堂へ昼食をとりに行くことにした。

第一章・Repetitive（part. 4）

4

昼食を済ませ、凜は図書館に戻ってきた。

席につき、机の上に置きっぱなしにしてあった例のプリントを手にとって眺める。専門書は参考にできないことは、午前中の段階で分かっている。今は、配列をよくよく眺めることで、何か手掛かりを見つけようと試みる以外にないようだ。

じっくりと配列に目を通す。そのうちに、ひとつ気になるところが見つかった。

1番目の塩基から数十塩基離れたところに、“ＣＣＣＴＡ”という配列がある。右側に視線をずらしていくと、さらに数十塩基先には、“ＣＣＡＴＡ”という配列が見つかった。さらにまた数十塩基先には、また“ＣＣＣＴＡ”…。このように、同じような配列がこのプリントに書かれた配列の全体にわたって散在していた。凜はさらにその配列の前の塩基配列にも注目してみた。すると、これもまた同様に、おおよそ全体にわたって散在している。

このような視点でよくよく眺めてみて、凜はこの配列の大きな特徴に気がついた。

“ＧＣＡＧＴＧＣＡＴＡＧＴＧＡＴＣＡＧＴＧＣＣＣＴＡ”。この２５の塩基で構成された配列、もしくは数塩基の違いはあるがこれとよく似た配列が、このプリントに書かれたＤＮＡ配列全体に散在していた。というよりは、むしろこの配列以外の塩基構成の配列の方が少ないという印象を受ける。つまり、このプリントに書かれている塩基配列は、ほぼリピート（反復）配列だと云えるということだ。

リピート配列とは、特定の領域において同じような塩基構成で繰り返される配列のことである。例えば、染色体のセントロメア（中心部を構成する領域）　やテロメア　（末端を構成する領域）は、それぞれ特有のリピート配列が、数百・数千も繰り返されており、これが領域特異的な機能に大きな役割をもっていると考えられている。つまり、この配列も何かの機能を担っていると考えても不自然ではない。

他に何か特徴はないだろうか。凜はプリント中に繰り返し登場するこの類似配列をより注意深く眺めてみた。すると、また興味深い特徴に気がついた。

これらの配列のほとんどに“ＡＧＴＧ”という配列が見つかったのだ。この配列が複数個確認できる方が多く、最大では３つ確認できる。しかし、それだけではこの“ＡＧＴＧ”という並びが、この類似配列に規則性をもって存在するものだとは云い難い。なぜなら、４つの塩基のみで構成される配列に特異性を見出すことはほぼ不可能であり、染色体ＤＮＡ上にもこの配列がたくさん存在するであろうことは、考える間でもなく、当然のことだからである。

そこで凜は別の４塩基で構成される配列を適当に身繕って、それがこのプリントの配列中に散在する２５の類似配列の中にどれだけ存在するかを調べてみた。まず、類似配列の先頭から４つ分塩基を抜きだし、“ＧＣＡＧ”という配列を考えてみる。しかし、この配列はプリントの配列中にそれほど多く存在するわけではなく、類似配列内にも、確認できるものと、いずれかの塩基が変わってしまっていて確認できないものがあった。次に、２塩基目から数えた“ＣＡＧＴ”という並びの場合。これは、凜が注目した“ＧＣＡＧＴＧＣＡＴＡＧＴＧＡＴＣＡＧＴＧＣＣＣＴＡ”という塩基配列で考えれば、２つ確認できる。しかし、プリント内全体で見ると、どこかの塩基が別の塩基に置き換わっているものが多く、それほど高頻度で見られるわけではなかった。他にも同様な方法でいくつか調べてみたが、やはり他の配列と比較しても、“ＡＧＴＧ”という並びは

特に多いようだ。
以上のことから、ふたつのことが分かった。ひとつはこのプリントの配列は、“ＧＣＡＧＴＧＣＡＴＡＧＴＧＡＴＣＡＧＴＧＣＣＣＴＡ”という配列、またはそれと類似した配列が繰り返されているということ。もうひとつは、この配列の中に“ＡＧＴＧ”という塩基配列が、群を抜いて多いということ。
石山の云う規則性とは、おそらくこのことだろう。
凜は課題を達成できた満足感に浸りながら、意気揚々と研究室に戻っていった。

第一章・Repetitive（part. 5）

5

「ほぉ。よく気づいたね」
石山が珍しく、感嘆の言葉を口にした。それでも彼の顔は、目じりが垂れ下がり、唇の端が上を向き、いやらしい笑窪が唇を挟んでいる。
凜は図書館から帰ると、すぐに教授室に赴いた。そして、自身の発見した規則性を石山に話したのだった。
「しかも、ただ類似配列が繰り返し登場するというだけでなく、その中にあるＡＧＴＧの配列にも目をつけるとは、思ってもいなかったよ」
相も変わらず嫌味な笑みを浮かべたまま、石山は云った。
「…それでこの課題には、どのような意味があるのですか？」
石山の称賛の言葉にはあまり取り合わず、凜はこう訊いた。石山が喋ることは、たとえ褒め言葉でも、嫌味にしか聞こえない。
「うーん、理由ねぇ…」
石山は少し考える素振りを見せてから答えた。
「まぁ、ひとつは君に頭の体操も兼ねて、テストをしたんだよ。君の着眼点や洞察力を試すという意味でも、いい機会だしね。けれど、それだけが理由じゃない。もうひとつの理由は、まだ今の時点では、君が今からどのような研究を行うのか教えることができないから、せめてこの配列を君に強く印象づけたかったということだ」
「つまり、この配列はこれからの研究に必要なものだということですか」
「もちろん。というより、この配列がこれから君が行う研究の最も

キーとなる配列だと思ってくれていい」
　石山はひと呼吸おいてから、さらに続ける。
「まぁ、今回の課題で、君にはそれなりにいい着眼点と、洞察力が備わっていることは分かった。じゃあ、次の課題へ行くとしようかな」
「えっ、また課題ですか」
「もちろん。まさか君、これから私が研究の詳細について教えるその時まで、のほほんと遊んでたらいいとでも思っていたのかな」
「はは…、まさか」
　凜は引きつった笑みを浮かべながら云った。が、実際のところ、石山の物云いに内心腹が立ったのだった。
　石山は、やはり小馬鹿にしたようにニヤニヤと笑いながら云う。
「なら結構。次は君に手を動かしてもらうからね」

第一章・Repetitive（part. 6）

6

3日後、凜はプリントアウトした実験データを持って、再び教授室へと赴いた。

「ほうほう、これはなかなか綺麗に出てるじゃないか」

石山は満足そうにそう呟いた。

3日前、石山は凜に4種類のサンプルを渡した。

「これらは4人の被験者から、とある細胞を採取し、それぞれDNAを抽出したものだ。因みにこれらは、サザンハイブリダイゼーション用のサンプリングをしてある。つまり、これから君が行ってもらう作業は、サザンハイブリダイゼーションによって、ある目的配列を検出してもらうことだ」

サザンハイブリダイゼーションとは、目的のDNA配列を検出する実験法のことであり、その検出には、プローブと呼ばれる目的の配列を鋳型にして作られたDNA断片が必要になる。凜は石山からプローブも渡されたが、そのプローブのことについては、石山は何も教えてくれなかったし、ましてやサンプルについての説明もハナッから乏しい。

（何の実験かは分からなくていいから、とりあえず作業だけしろってことかよ）

凜は不満に思った。自分が何を調べているのか分からないまま実験をするというのは、精神的に少々しんどいものだ。しかし、そんなことも云ってられないようだった。とりあえず、作業を進めないことには、次には進めない。

幸い、解析のためのサンプル調製はすでに終わっていたので、凜がするのは検出のための作業のみで済んだ。その作業に費やした日数が3日間というわけである。

凜が石山に提出したデータは、一度パソコンでスキャンし、専用の検出ソフトで処理したものであったが、その結果は次のようになる。一番左のレーンはＤＮＡマーカー　（ＤＮＡ断片の分子数を測定するために流すＤＮＡサンプル）　であり、石山にもらったサンプルではなく、凜が独自で使用したものである。次の2番目のレーンから5番目のレーンまでが、サンプルになるのだが、凜はこれらを便宜的に左からサンプルＡ，　Ｂ，　Ｃ，　Ｄと呼ぶことにした。その中のサンプルＡ，　Ｃ，　Ｄには目立ったバンドが検出できず、薄くて細いバンドが比較的分子数の小さい位置にまばらに存在するだけであった。一方で、サンプルＢには比較的濃いバンドがおよそ１０　Ｋｂの位置に確認できた。つまり、この中で少なくとも顕著に目的配列の存在が確認できたのは、サンプルＢのみということだ。

「他のサンプルには、このようなバンドは一切見えなかったのかな」

石山の質問に凜は答える。

「ええ。露光時間を変えたりもしてみましたが、それらしきバンドは検出できませんでした。もっとも、下の方に見えている細かいバンドの中に、目的の配列がないことは否定できないかも知れませんが」

「いや、これだけごちゃごちゃ出てるってことはノンスペ　（ｎｏｎ－ｓｐｅｃｉｆｉｃ：　非特異的という意味）　だろう。確認できなかったととらえた方がいいねぇ」

石山は珍しく、屈託のない満足そうな笑みを浮かべていた。石山は普段は人を食ったような態度が板についているが、こと実験のことになると、途端に少年のように純粋な印象に変わるのだ。研究というものが、本当に好きなのかも知れない。

「そろそろ教えてもらえませんか。今からやろうとしている研究が、

一体どういうものなのか」
「いいでしょう、そんなに引き伸ばすのも、無意味だしね。ちょっと待ってなさい」
石山はそう云って立ち上がり、彼の目の前にある引き出しを開け、一部の論文を取り出した。そして、それを凜の目の前に置く。凜は見るともなく、その論文のタイトルを眺めた。
『ＳＤＲ－ｒｅｇｉｏｎ ｉｓ ｔｈｅ ｋｅｙ ｔｈａｔ ｍａｋｅｓ ｔｈｅ ｐｅｒｓｏｎ ｄｉｖｅ ｔｏ ｔｈｅ Ｓｐｉｒｉｔｕａｌ Ｗｏｒｌｄ』
そこにはこう書かれていた。
和訳すると、このようになるだろうか。
『ＳＤＲ領域は人を精神の世界へダイブさせる鍵である』
著者の欄には、アメリカやヨーロッパ、中国、韓国など、さまざまな国の人間の名前が連なり、最後にＭｉｔｓｕｏ Ｉｓｈｉｙａｍａという表記がある。つまりこれは、石山が参加した研究についての論文である。それどころか、石山の名前が最後にあることから、おそらくは石山がこの中のトップだろう。
「何ですか、これ」
凜は訊いた。見出しを見る限り、当研究室の研究内容と関わるような論文なのかさえ、予想がつかない。そもそも、見出しにある“ＳＤＲ領域”というものが何なのか、凜は知らないのだ。
「これから君が行う研究に非常に参考になる論文だ。いや、むしろここに書かれていることが、君に与えるテーマそのものと云ってもいいかな」
「…これがですか？」
「ああ。だから、読んできたまえ。君がこれを読んでから、改めて研究の詳細について、話すとしよう」
見れば、石山はすでに、人を見下すような顔つきを取り戻していた。

7

夜中の2時すぎ。
凜は半日かかってようやく論文を読み終えた。
凜も生命科学を長年勉強してきた者として、論文の読み方くらいは心得ている。いくら英語で書かれているとはいえ、よっぽど自分とは関係ない分野の論文などではない限り、長くても2，　3時間で一本は読める自信はある。この論文は、追及しているテーマとしては凜には初めてのものであったが、必要な背景知識や実験手法については、馴染みのあるものであり、その部分でのハンディキャップというものは殆どなかった。にも拘らず、読み終わるのにこれだけ時間がかかってしまった。その理由は明らかだった。論文に書かれている内容が、意外といえば意外すぎる、とてもにわかには信じられないような内容だったのだ。そのため、読み違いをしているのではないかと、同じ文章を何度も読み返したり、前節に折り返したりを繰り返したため、否が応でも時間をかけざるを得なかったのである。
「なんだよこれ…」
これが、凜が論文を読み終えて最初に出た言葉だった。

翌日、凜はいつもより早く、研究室で定められた入室時刻よりも早く、研究室に着いた。
石山がどういうつもりで自分にこんな論文を読ませたのか、その魂胆が知りたくて、いてもたってもいられなかったのである。
「君がこんなに早く来るなんて、意外だね」

教授室で石山は凜に、まずはこう切り出した。
「一刻も早く、先生の考えが知りたいと思いまして」
凜は強い口調で返した。
「論文、読んでくれたんだね」
「ええ、読みました」
凜は鞄から、昨日石山にもらった論文を取り出し、パサッと机に置いた。
「何ですか、これ」
そして、この論文をもらった時と同じ台詞を吐いた。
石山は、凜の近くまで歩み寄り、見下ろすような形で、机の上に置かれた論文と凜を交互に見やり、ニヤリと笑った。

凜が昨日読んだ論文。そこには、おおよそこのようなことが書かれていた。

『この宇宙には、我々の生きる現実世界とは別の世界が存在する。それは、この世に生きる者たちの感情や思考、本能行動などによって構築される“精神世界（Ｓｐｉｒｉｔｕａｌ－Ｗｏｒｌｄ）”と呼ばれるものである。精神世界は現実に住む生き物たちの意思や感情によって、その様相を変えながら、どんどん大きくなっているが、現実世界に対してもフィードバックして、この世の行く末にも影響すると考えられている。そのような精神世界とコンタクトが取れる人間が一部には存在し、またその中のごくごく一部は、自身の精神を精神世界に移すこともでき、そこでの活動によって精神世界の様態を一部変更することで、現実世界の行く末を変えることもできる。ここで、このように精神世界へ自身の魂を赴かせることを、“ダイブする”と呼称することにする。以前の研究で、彼らの脳内に通常の人間には発現していないタンパク質群（ダイビングファクター）が見つかっており、それが彼らのダイブに大きく関わっているということや、それらのダイビングファクターは実は脳だけ

でなく、身体中の細胞から発現していることが報告されたが、その機構に関する詳細は不明であった。今回、我々はその機構を分子細胞生物学的な視点からより詳細に解明するため、ダイビングファクターを発現している人々のゲノムを網羅的に調べた。その結果、通常の人間には持ち合わせていない特有のリピート配列が見つかった。つまりその配列は、その人間が精神世界へダイブするために必要になる配列であると予想され、我々はその配列をＳｐｉｒｉｔｕａｌ－ｗｏｒｌｄ Ｄｉｖｉｎｇ, Ｒｅｐｅｔｉｔｉｖｅ （ＳＤＲ）配列、その配列がある領域をＳＤＲ領域と名づけた。今後、このＳＤＲ配列がどのようにして精神世界へのダイブに関わるか、解析を続ける予定である』

「僕には、悪い冗談としか思えません」
凜は包み隠さず、率直な意見を云った。
「どうしてそう思うのかな」
凜の言葉に、石山はしばし真面目な顔になって応えた。
「君は世に云う“常識”というものを、あまり意に介さない学生だと思っていたが、変なところで“常識”にこだわるんだね。いいかい、この世には我々の今の認識では測り知れないような真実がたくさん存在するんだ。我々の仕事は、科学という武器をもってその未知の領域に踏み込み、真実を解明することだ。そのためには、“常識”などにとらわれていてはいけないんだよ」
「…分かりました。説明を、いただけますか」
凜は石山を促した。この論文についての詳細、そして自分自身がこれから始めることを、凜も知りたかったのだ。
「いいでしょう。…まず、最初に訊くが、君は“運命”や“奇跡”というものを信じるかね」
「“運命”や“奇跡”ですか。…どうでしょうね」
石山がなぜこんなところから話し始めたのか、凜には分からなかった。しかし、ここはおとなしく石山の話の続きを聞くことにした。

「常識的にみて、これらの言葉は非科学的だ。この世に起こるすべての事象は偶然であり、“運命”や“奇跡”などは、それがたまたま幸運な方向に作用した際の、その人の主観的な見解だと、多くの人は云うことだろう。しかし、本当にそうだろうか。この世には、それでも説明のつかないような、驚くべき事例がいくつも存在する。私は、そういう現象の中には、単なる偶然ではなく、何か今の我々の測り知れない、人智を超えた力がはたらいているのではないか、そう思ったのだよ」

まあ、それはそうかも知れないが、と凜は思った。

「世界中にも、私と同じように考えている研究者は少なからずいてね、彼らと手を組んで、色々調べてみたんだ。我々が目をつけたのは、世界中の“奇跡”を起こすと云われている人間、いわゆる新興宗教の教祖や超能力者といった人々だった。そういう超絶的な力が実在するのか、という疑問もあるだろうが、そこはあるという前提で話を聞いてくれ。いいかね」

凜にはこの時点ですでに、この話が真実味を帯びるのかどうか甚だ疑問だったが、それを云いだすと面倒なことになりそうなので、とりあえず「ああ、はぁ」と適当に相槌を打った。

石山は続ける。

「よろしい。まぁ、そういう人々に注目はしたんだが、インチキなのもたくさんいるからね、その辺りは厳しい目で調べた。そうするうちに、ある超能力者を名乗る男から、興味深い話を聞くことができた」

凜は「どんな話ですか？」と続きを促す。

「“私は宇宙に行くことができる”というんだよ。そして、“宇宙からパワーをもらって、私は奇跡を起こすことができる”とも、“宇宙には我々人間の生きてきた歴史や、意思が形や色となって存在していて、それを触ったり、いじったりすることで、人や世界の未来までをも変えることができる”とも云ってた。その人は中東のとある国の人だったんだが、さらに調べてみたら、他にも世界中で、

これと似たようなことを云っている人が多くいたんだ。もっとも、まったく同じというわけではなく、中東の人が“宇宙”と云っていたものを、“心の世界”と云ったり、“神の国”と云ったり、表現はさまざまだったがね」
「そこから、精神世界の存在を予想した、というわけですか」
「まあ、そういうことかな。我々はここで、この世には、私たちの住む世界とは別に、私たちの辿ってきた進化の歴史をファイリングし、その中で生まれてきた私たちの思想や感情で膨らませた世界が存在すると考え、そしてその世界を“精神世界”と名づけたわけだ。もちろん、そこに至るまでには、科学的な根拠に当てはめながら、じっくりと思慮深い検討を十分に重ねたけどね」
「なるほどねぇ。しかし――」
ここで、凜には大きな疑問が浮かび上がっていた。それは、科学という領域に足を踏み入れた者なら、誰しもが思うであろう疑問であった。
「ここまでで行ったことは、飽くまで情報を総合して得られた“仮説”に過ぎず、実験的な解明は一切行っていないですよね」
凜は石山を上目遣いで睨むようにして見る。石山は、不気味とも思えるぐらい満足気な笑みを浮かべていた。まるで、凜の質問を歓迎するかのようだ。
「そうだ。そこでだ…」
石山はひと呼吸おいて続けた。
「我々の本領発揮となるわけだ。我々のグループには、物理学・化学・地学といった、実にさまざまな分野の研究者がいた。我々は、それぞれがそれぞれの知見をもって、精神世界の謎について研究を進めることにした。その中で、私たち生物屋は、二つのグループに分かれ、各々で生物学的な知見から解明を進めることにした。そのうち、我々とは別のグループが、ダイブできる人間の脳からダイビングファクターと呼ばれるタンパク質群を単離したんだ。しかも、そのタンパク群は、脳だけでなく身体中のあらゆる細胞から発現し

得るということだった。この発見は、我々にとって大きな衝撃だった。これまで非科学的とまで云われていた未知の現象と、生物学的な分子機構との関わりを示す大きな発見だったからだ」
　確かに、ここに来て急に話が現実的なものになったように思える。
「こうなっては我々も負けてはいられない。我々のグループもより意気込みをもって、研究を進めた。まず、向こうのグループがダイビングファクターという、ダイブ機構に関わる最終産物を発見したから、我々は逆に、機構のはじまりから追求してみようと考えた。それで、注目したのがゲノム情報だ。ダイブできる人間の染色体ＤＮＡを網羅的に調べることで、普通の人間のそれにはない、特別なものが見つかるのではないかと考えたわけだ。そこで、出会った世界中の超能力者と呼ばれる人たちから、血液を提供してもらってね。血液細胞からゲノムを抽出して調べてみた。すると、興味深いことが分かった。どの被験者のサンプルにも、普通の人のゲノムには見られない配列が特定の位置に見つかったんだよ。しかも、その配列は同じような配列が繰り返されることで構成されていた」
「まさか、それがＳＤＲ領域？」
「そうだ。ほら、ここにデータが載ってるでしょ」
　石山は、凜が机に放り出した論文を開いてみせた。開かれたページに、大きく図が掲載されていた。それは先ほど石山が云った通り、ＳＤＲ領域の存在を示したデータであった。
「あと、これも一応論文に書いてあったと思うが、調べたＳＤＲ配列の長さはまちまちで、相同性もそれほど高くはなかった」
「…ああ、そういえば、そんなことも書かれてましたね」
「しかし、だ。ここには、まだ論文には書いていない、興味深い共通性があるんだよ。実はね、精神世界に対するアプローチが強い超能力者のほうが、このＳＤＲ配列の長さも長く、特有なリピートも安定して存在していたんだよ」
　凜は石山の言葉がはっきりとは呑み込めず、「えっ、どういうことですか？」と返した。

「つまりね。先ほど、“宇宙に行くことで人の未来を変えることができる”と云ってた超能力者の話をしただろう。このように、精神世界にアプローチできる人の中には、直接世界に入り込んで、活動をすることができる人もいる。しかし、その一方で、遠くにある景色をぼんやりと眺めるようにしか、精神世界を見ることができず、人の漠然とした未来を予言することしかできないような人もいる。一言でアプローチできるとは云っても、その能力は千差万別なんだよ。また一方で、我々のＳＤＲ領域の解析の結果では、ＳＤＲ配列の長さが比較的長く、リピートも変異したりせずに安定して存在しているケースもあれば、長さが短く、リピートが変異していたり間に余計な配列が入っていたりして、安定していないケースもあった。そして、精神世界へのアプローチする力の強さと、このＳＤＲ配列の安定性を調べてみたら、力が強い方がＳＤＲ配列も安定して存在しており、逆に力が弱い方はＳＤＲ配列も安定して存在していないという、相関性が出たんだよ。このことから、我々はＳＤＲ配列が精神世界へのダイブにおいて非常に重要な配列であると結論づけたわけだ」

「では、リピート配列の中に多く見られた、“ＡＧＴＧ”という配列は何ですか」

「それについては、まだはっきりとは分かっていない。でも、おそらくこのＳＤＲ配列に特異的に結合するタンパク質があって、そのタンパク質はＡＧＴＧという配列を結合のための目印にしているのかも知れないね。今後、そのことも含めてより詳細な解明を目指す予定だ」

「うーん、筋は通っているように思えますが…」

凜は考えこんでしまった。常識を捨てろと云われても、あまりに現実離れしているように感じ、信じがたいと思えてしまうのは否めない。

「まあ、君がこの研究が嫌だというなら、今からでもやめて構わないんだよ。前のテーマに戻ってもね」

「……いや、やりますよ」
凜は答えた。以前のテーマに戻る気など、さらさらなかった。それに、これから与えられるテーマは得体の知れないものだが、これに限らず研究というもの自体が堅実な道ではないことを、凜は知っていた。乗ってみるのも悪くはないかな、彼はそんな風に思ったのだ。
「そうか。引き受けてくれるか」
このとき、石山の浮かべた微笑みが、凜にはなぜか少し奇妙に思えた。しかし、思い過ごしだろうと、あえて気にしないようにし、さらに質問を投げかけた。
「それで、僕は何をしたらいいのですか」
「そうだね…。詳しい話はまた後日するとして、簡単に説明すると、大きく分けてふたつのことを君にしてもらおうと思っている。まずひとつは、実験によってＳＤＲ配列と精神世界との関わりについて解明してもらうこと。そして、もうひとつは、いわゆるフィールドワークというやつだ」
「フィールドワーク…？」
「君自身が実際に精神世界にダイブして、色々調査をしてもらおうと思うんだよ」
石山の言葉に、凜は驚いた。
「ちょ、ちょっと待って下さい。話によると、精神世界にはＳＤＲ配列というものがなくては行くことができないんですよね。僕がどうやって行くっていうんですか」
石山はフン、と鼻で息をついた。鼻で笑われたような印象も受ける。
「論文を読んでもらう前に、君にふたつの課題を出したろう。もう気づいているだろうが、あれは君にＳＤＲ配列について調べてもらっていたんだよ。ひとつめの課題ではＳＤＲ配列という特有のリピート配列の存在を知ってもらい、次の課題ではそれを検出してもらったわけだ」

確かに、そのことについては、凜には論文を読んだ時から分かっていることだった。“ＧＣＡＧＴＧＣＡＴＡＧＴＧＡＴＣＡＧＴＧＣＣＣＴＡ”という特有の塩基配列は、あの論文にそのまま書かれていたし、そうなると、次に行ったサザンハイブリダイゼーションの実験も、石山からは何も云われなかったが、あの配列の検出のために行ったのだろうと、容易に想像がつく。

「あのとき君に渡したプリントに書かれてた配列、そしてＳＤＲ配列の存在が確認できたサンプル。あれらは、とあるひとりの人間からとったものなんだよ。もっと云うなら、その人間とは、この研究科の学生だ。前に学内で健康診断を行っただろう。実は、その時行った血液検査のサンプルを少し頂戴してね、学内にＳＤＲ配列をもった学生がいるか、調査をしたんだよ。その結果、ひとりの学生がこの配列を持っていることが分かった。私はその学生に目をつけた、というわけだ」

「その学生って、まさか…」

「そう、君のことだよ」

何てことだ…、と凜は思った。よりにもよって自分は、自分自身のＤＮＡ情報を解析していたのだ。

このとき浮かべていた石山の笑みが、今度こそ凜には不気味なものに映った。

第二章・Spiral（part. 1）

（第二章・Spiral）

1

１０月といえば、長かった夏がようやく終わり、ようやく秋らしい陽気に世間は包まれてくる時期である。小中学校では、運動会に向けての本格的な準備で忙しい頃合いだろうし、大抵の大学ではこの時期から後期の授業が始まるところだ。世間は秋を歓迎しながらも、やがて訪れる冬に向けての準備も始めなければならない、１０月とはそんな時期でもあるだろう。

日下（にっか）　愛希（あき）はそんな秋の昼下がりを楽しむように歩いていた。彼女は私立Ｒ大学の学部２年生であり、今は後期一日目の授業が終わって、帰宅しているところであった。長い夏休みが終わって、久々に大学に通えるのが嬉しくもある。もちろん、休みというのは彼女にとって嬉しいものだが、あまりに長い休みとなると、暇を持て余すことも少なくない。授業の再開は、丁度よい刺激となるわけだ。

愛希の歩く道の先に、彼女の行きつけのカフェが見えてきた。

「ちょっと、寄り道していこうかな」

彼女は誰に云う訳でもなく、小さく呟いて、カフェの入り口まで歩いてゆく。ガラス窓ごしに店内を眺めると、座席は結構空いていた。それなりに落ち着けそうだ。

店の中に入ると、カウンターに彼女と同年代くらいの背格好をした女性が立っていた。愛希が笑顔でカウンターまで歩いてゆくと、その女性も愛希に気づいておもむろに笑顔になった。

「こんにちは、美菜さん」と、愛希が云うと、その女性も「あら愛

希ちゃん、いらっしゃい」と応じる。
「今日は何かあったの？」
「今日から大学の後期の授業始まりなの。さっき終わったところだから、帰りに寄ったんだ」
愛希とこの店の店員、逢坂（おうさか）美菜（みな）とは、プライベートなつき合いはなく、話すのもこのカフェの中のみであるが、今ではふたりはお互い気兼ねなく、互いの名前で呼び合い、くだけた感じで話せるようになっていた。愛希は元来明るい性格で、誰に対しても朗らかで人見知りもしないので、色んな場面で出会った人とこのように親しくなれるという特徴をもっていた。これは彼女の長所でもあり、また周囲から変わり者と評される理由のひとつでもある。
愛希は注文したカフェラテを手に、窓際の席についた。ひとりでカフェラテを飲みながら街の風景を眺める。このような時間は、愛希にとっては心地よいものだった。友人と語らうのも楽しいが、ひとりで過ごすのも彼女にとっては大事な時間だった。もともと彼女はマイペースな性分なので、ずっと誰かと一緒にいると疲れてしまう。そこで、彼女は1日に一度は、ひとりで過ごす時間を意識的にでも作っているのだった。
愛希はふと思いたち、バッグから一枚の地図を取り出した。今日の夕刻、訪問することになっている場所の付近が描かれているものだ。地図をよく見ると、訪問先は今いるこのカフェから割と近い。いったん家に帰ってからうかがうつもりだったが、少しここでゆっくりしてから向かってもいいだろう。
愛希はそう思って、再びカウンターへと赴き、美菜にサンドを注文した。席へと戻ると、愛希はバッグから一冊の本を取り出した。今期から始まる大学の講義で使う教科書である。
何気に本を眺めていたら、美菜が注文したサンドを運んできた。
「うわ、何、その本」
美菜は少し驚いたように云う。
「うん。大学の今度の授業で使う教科書なの」

「へぇ、あなた結構頭いいのね。知らなかった」
運んできたサンドをテーブルに置きながら、美菜は感心したように云った。
「そんなことないよ」
「邪魔しちゃ悪いから、私もう行くね。頑張って」
店員はそう云って、カウンターへと戻っていった。邪魔しちゃ悪いからと云うが、実際にはむしろ仕事中である彼女の方が忙しいはずだ。
愛希はサンドを口にしながら、続けて本を読んだ。彼女が本を読み出した理由、それは訪問先に行く前に軽く下調べをしておきたかったからだった。生命理学科に所属する彼女にとって、この後の用事はまったく未知の領域というわけではない。しかし、少しでも下調べをしておいた方が、気持ちも落ち着くというものだろう。
適当に本を読んでから、彼女は本を閉じ、バッグにしまった。腕時計を見ると、約束の時間は刻一刻と迫ってくる。彼女は少し緊張してきた。もともと彼女は物事をあまり深刻にとらえない、楽天的な性格なのだが、今回ばかりは自分に大きな使命が課せられていると思わずにはいられなかった。
彼女は、バッグから一枚の封筒を取り出した。端が綺麗に切られている。中から一枚の封書を取り出し、広げる。そして、そこに書かれている文字を神妙な顔つきで眺めた。
封書に書かれた文章の中に『精神世界』という言葉があった。愛希にはその文字がやたらと重々しいものに感じた。自分なんかに、こんな大役が務まるのか、という思いもあった。しかし、自分の思いよりも大切なものがあると、彼女は覚悟を決めていた。私にできる精一杯のことをやろうと。
愛希に課せられたもの。それは、被験者として精神世界の謎を解明する手伝いをすることであった。

第二章・Spiral（part. 2）

2

時刻は午後5時を迎えようとしている。
愛希は定刻通り、手紙で指定されていた場所までやって来た。
指定された場所、それは、見るからに古びた個人経営らしき病院だった。『石山医院』という看板が掲げられているが、今では開業しているのかどうかも分からない。
愛希は手紙で指示された通り、病院の門戸を開き、中へ入った。中は薄暗く、少し埃っぽい上に、若干カビ臭くもあった。愛希は廊下を歩いてゆく。一歩踏み出す度に、ミシミシと床が鳴る。
やがて愛希は、電気がついている部屋を見つけた。部屋の入り口の上には、『診察室』と書かれたプレートが貼られている。どうやらここが待ち合わせの場所のようだ。愛希はゆっくりとドアを二度ノックし、「こんにちは」と挨拶した。
「誰かな」
ドアの向こうから声がする。
「日下　愛希です」
「入りたまえ」
愛希はノブを回して、ドアを開けた。部屋の中には、年配の男性と自分より少し年上くらいの青年がいた。
「はじめまして」
愛希はふたりを見て、笑顔でおじぎをしながら云った。
ふたりのうち、年配の方が自分はK大で研究を行っている石山だと名乗った。次に、彼は隣の青年を指し、研究室の学生である鳥栖凜だと紹介した。

これが凜と愛希とのファーストコンタクトであった。ふたりは今後、パートナーとして多くの行動を共にするようになる。
ふいに石山が立ち上がった。彼は愛希を見下ろして云う。
「日下くん、早速だが研究の準備に取り掛からせてもらう。君はここで何をすることになるか、分かっているかな」
「はい。私が精神世界に直接ダイブするんですね」
「その通りだ。私はこれからそのための準備にかからせてもらうね」
石山は愛希に微笑んだ後、凜の方を向いて「鳥栖くん」と云った。石山に急に呼ばれ、凜は少し意外そうに「はい？」と返した。
石山は凜に告げた。
「その間、日下くんに精神世界のことを色々教えてやってくれ」
「えっ、僕がですか」
「そうだ。できるだろう」
凜にそう云うと、石山は愛希の方へ向き直り、笑顔で云った。
「それじゃあ、じっくり教えてもらってくれ」
「はい」
愛希も笑顔で応じる。
その後、石山は診察室から出ていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8500y/

水の螺旋

2011年12月22日11時45分発行